

ワイルドの修辞表現 (小説「ドリアン・グレイの肖像」に言及して)

三 嶋 君 夫

Similie and Metaphor used in the "Picture of Dorian Gray"
by Oscar Wilde

MISHIMA Kimio

序

一人の美青年の魂がヘンリー卿の壮大な観念の万華鏡に彩られ新ヘドニストを求め大海をさまよったあげく醜悪の衣をまとい滅び行く有様は、多くのヴィクトリアンの心中を安堵感で満たしたに違いない。時はまさに十九世紀末、ところはロンドン。美青年の名はドリアン・グレイ。この物語こそ1890年6月、「リビンコッツ・マンスリー・マガジン」に全編一時に発表されたワイルド作「ドリアン・グレイの肖像」に他ならない。

‘the rich odour of roses’(p.7)(バラの豊かな香り) ‘the heavy scent of the lilac’(p.7)(ライラックの重厚な香り) ‘delicate perfume of the pink-flowering thorn’(p.7)(ピンク色のサンザシのほのかな香り) などの知覚を喚起させる冒頭はあまりに有名であるが、それにあいまって全文を覆う耽美的な文体は、美しい言葉に耽溺しワイルド独自の彩り豊かな世紀末を表出しているかのように思われる。しかし、その冒頭の裏側では世紀末を象徴するヘンリー卿が無数のタバコを吸いながら時代の象徴ともいえる「倦怠」とともにドリアンとの邂逅を待ち望んでいたのである。

舞台となったロンドンを物語の中でドリアンは ‘…this grey, monstrous London of ours, with its myriads of people, its sordid sinners, and its splendid sins, …’(p.57) 「数知れぬ人間、下賤な罪びと、そしてすばらしい罪を蔵しているこの灰色の怪物のロンドン」と表現し、ヘンリー卿はこの時代を ‘…an age so limited and vulgar as our own, an age grossly carnal in its pleasures, and grossly common in its aims…’(p.44) 「現代のように限られた俗悪な時代、快樂といえば下品な肉欲しかなく、目的とて陳腐きわまりない時代」と、そ

れぞれに道徳的デカダンの意識を共有している。さらに、エスプリの快樂にふけるナルバラ夫人との会話でも ‘Fin de siècle’ (p.198) 「この世の終わり」、‘Fin du globe’ (p.198) 「世紀末」、‘Life is a great disappointment’ (p.198) 「人生は大いなる失望」と近代ヨーロッパの破滅と終末の観念に拍車をかける表現が続いている。

繰り返すが世は病的、退廃的傾向の起こる没落期を迎えようとしているのである。そんな折に、ワイルドはどうして彼の芸術観や倫理観を含む長篇小説『ドリアン・グレイの肖像』をこの世に送り出したのであろうか。

イギリスのもつ病弊、美の重要性、生きることの大切さなどをこの「美的状況につつまれた空想的美の世界」⁽¹⁾ をとおして世に伝えようとしたのであろうか。山田勝氏はその著『世紀末とダンディズム』のなかで「オスカー・ワイルドの作品は、ダンディーとしての生活の表現の一つであった。」⁽²⁾ 「ドリアンの若さと美は悪を隠すための仮面ではない。美しい生き様を証明するための仮面なのである。その意味で彼の容姿はダンディズムの完璧な象徴である。」⁽³⁾ と述べている。

しかし、ドリアン・グレイの放蕩ぶりやその背徳や退廃は、キリスト教的伝統という偽善の仮面を被り続ける功利主義者にとっては吐き気をもよおす非道徳的行動と映ったに違いない。ワイルドにとっては、そんな彼らと闘うことが彼の芸術家としての本質であり「生」の証しになるものと想定できるのである。偽悪と言う仮面を被り実生活の芸術至上主義を實踐してこそ「美への献身」、「美的観照」に徹する「生」を生き続けることができるのであろう。その意味で、ドリアン・グレイの象徴的生き方はワイルドの本質をある意味で具現化したものと思えるのである。

ドリアン・グレイの周りには、多くの知覚表現が表れる。ドリアンが「生」に目覚め、「罪」の世界で悩み苦しむ、新ヘドニストとして「終焉」をむかえる波乱の行程を作者ワイルドは見事に「色彩」等を使い表現している。それはまるで文学作品のテーマをそれらの知覚感覚に託しているかのようにも思える。

本稿では、知覚表現の類似性が明示的に示される「シミリ」と暗示的に示される「メタファ」について分類を試みるものである。なお、分類する対象が数多く存するため、この小説の特に重大な意味を持つ第一章から第七章に限定し考察するものとする。それは、ヘンリー・ワットン卿の言葉と画家バジル・ホールワードが描いた肖像画によって自己の「生」を認識したドリアン・グレイがあらゆる新しいことを知ろうとする欲望に目覚め、場末の女優シビル・ベインに恋をし「愛の普遍性」のむなしさに気付く場面までである。そして、大切なのは彼の良心である「肖像画」の変化に始めて気付くのが第七章であることを付加しておきたい。

2

メタファとシミリについて、池田拓郎氏は次のように定義している。

Aというものの性質・内容・動作などを叙するのに、同種のA'やaではなく表面上異種・異類のBによる等式化または近接化で表現するのがメタファである。⁽⁴⁾

シミリはAをBで表す形式だが、A = Bではなく、A = as/as though/likeのごとく日本語の「ような」にあたる比較機能を示す語句 (as/as if/as though/like⁽⁵⁾ など) が入るのがシミリである。

この章では「ドリアン・グレイの肖像」(第一章から第七章) に表出するメタファとシミリをその文法的構造から分類しようとするものである。前述したように等式化または近接化されたものを主体に対し客体として表し、主体とのかかわりの中でその属性を考慮し文法的分類を試みる。分類に際し主体になるものをA、客体になるものをB、また一つの文の中で主体に対し複数の表れる客体をC、D…と表記する。

さらに、主体、客体を示す、語、句、節、文において、主体には二重線、客体には下線を引くこととする。また、一つの文の中で主体、客体になりえるものや、上記C、Dに相当するものについては波線を引くものとする。

分類は、池田拓郎著『英語文体論』を参考とし、以下のように考えるが、一つの文中にメタファとシミリを含む文も、あえて重複して引用することとした。また、メタファとシミリについては画然として一線を引けないように思えるものもあることを明記しておきたい。分類上、次の1) から4) は、メタファ、5) から7) はシミリを表している。

- 1) A=B (Aの性質をBで解明)
- 2) A has B (Aの持つ属性をBで表す)
- 3) B of A
- 4) BA (Bを形容詞的)
- 5) like によるシミリ
- 6) as によるシミリ
- 7) as if / as though によるシミリ

1) A=B (Aの性質をBで解明) について

1. She is a peacock in everything but beauty. (p.13)
(彼女は美しさを除けばあらゆる点で孔雀そっくりです)

2. Life suddenly became fiery-coloured to him. (p.26)
(人生が突然、炎のような色彩を帯びた)
3. Beauty is a form of Genius — is higher, indeed, than Genius, as it needs no explanation. (p.29)
(美は天才の一つの型である。嫌、それは説明を必要としないゆえに天才よりも高次のものである)
4. I am no more to you than a green bronze figure. (p.34)
(私はあなたにとって緑色のブロンズ像にすぎない)
5. I am less to you than your ivory Hermes or your silver Faun. (p.34)
(私はあなたにとって象牙でできたヘルメス像や銀製の牧神にも及ばない)
6. Sin is the only real colour-element left in modern life. (p.37)
(罪悪だけが唯一、現代生活に残された色彩要素だ)
7. The fellow spitted his man as if he had been a pigeon. (p.41)
(奴は彼を鳩かなにかのように刺し殺した)
8. He could be made Titan or a toy. (p.44)
(彼はタイタンにも玩具にも作りあげることができる)
9. To test Reality we must see it on the tight-rope, when the Verities become acrobats we can judge them. (p.48)
(事物の本体を見極めようとするならそれに綱渡りを演じさせねばならない。真理が軽業師になった時はじめて私たちはそれに判定を与えることができる)
10. Her white feet. (p.50) (Her=philosophy)
(「哲学」の白い足)
11. At last, liveried in the costume of the age, Reality entered the room in the shape of a servant to tell the Duchess that her carriage was waiting. (p.50)
(ついに、現代の衣装に身を包んだ現実が召使いの形をとって部屋に現れ公爵夫人に馬車が待っている旨を告げた)
12. His five bankruptcies were entirely due to “the Bard”, as he insisted on calling him. (p.62) (him=Shakespeare)
(彼の五度の破産はまったく「詩人」のおかげであった。彼はシェイクスピアのことをそう読んでいた。)
13. Sibyl is the only thing I care about. (p.63)
(シビルは私が気にする唯一のものである。)
14. When I think of the wonderful soul that is hidden away in that little ivory body,... (p.63)
(私は小さな象牙の体に隠れたすばらしい魂を思うと。)

15. Was the soul a shadow seated in the house of sin? (p.67)
(魂は罪の家にすわる影だったのか。)
16. Certainly Dorian Gray was a subject made to his hand, … (p.68)
(確かにドリアン・グレイは彼の手によって作られた題材でした。)
17. Spring-time for me, I think, a very dance of blossoms in blue skies. (p.78)
(私にとっては春、まさに青い空に咲く花のダンスを思わせる。)
18. The curves of her throat were the curves of a white lily. (p.95)
(のどの曲線は白ゆりの曲線だった。)
19. The sky was pure opal now. (p.102)
(空はまじりけのないオパールだった。)

2) A has B (Aの持つ属性をBで表す) について

1. He was bare-headed, and the leaves had tossed his rebellious curls and tangled all their gilded threads. (p.28)
(むきだしの頭の乱れた毛をライラックの葉がかき乱し黄金の糸をすっかりもつれさせた)
2. Time is jealous of you, and wars against your lilies and your roses. (p.30)
(時はあなたを妬み、ユリやバラのごときあなたの美しさに敵対している)
3. His eyes deepened into amethyst, and across them came a mist of tears. (p.33)
(眼は紫水晶を思わせる深い色を帯びて涙にかすんだ)
4. Life having its elaborate masterpieces, just as poetry has, or sculpture, or painting. (p.67)
(人生に詩や彫刻や絵画のように精巧に作り上げた傑作がある。)
5. The sky hollowed itself into a perfect pearl. (p.101)
(空は完全な真珠の中にくぼんでいった。)

3) B of A について

1. Tremulous branches seemed hardly able to bear the burden of a beauty so flame-like as theirs. (p.7)
(かすかに震える枝々は炎にも似た美しさ同様の重荷に耐えるのが精一杯のようだった)
2. The duty gilt horns of the straggling woodbine. (p.7)
(埃にまみれたすいかずらの金箔の角)
3. The dim roar of London was like the bourdon note of a distant organ. (p.7)

(かすかなロンドンの騒音は遠くのオルガンの最低音のようだった)

4. '...', and looking up at the little clouds that, like raveled skeins of glossy white silk, were drifting across the hollowed turquoise of the summer sky. (p.14)
(そんな勝手な言いぐさはない。ヘンリー卿は帽子を後ろにずらせながらつやつやした白い絹糸のもつれのような雲の小さい塊がトルコ色した夏空を横切るのを眺めながら叫んだ)
5. 'A dream of form in days of thought': -who is it who says that? I forget; but it is what Dorian Gray has been to me. (p.16)
(思考の日に見る様式の夢。 - 誰がそういったのか覚えていないが、それはまさにドリアン・グレイそのものである)
6. The mind of the thoroughly well-informed man is a dreadful thing. It is like a bric-à-brac shop. (p.18)
(博識家の精神は話にならない代物でそれは古物屋の店先のようなものである)
7. Beauty is a form of Genius — is higher, indeed, than Genius, as it needs no explanation. (p.29)
(美は天才の一つの型である。嫌、それは説明を必要としないゆえに天才よりも高次のものである)
8. It is of the great facts of the world, like sunlight, or spring-time, or the reflection in dark waters of that silver shell we call the moon. (p.29) (It=Beauty)
(美は陽光や春、あるいは人が月と呼ぶあの銀色に輝く貝が暗い水面に落とす影のごときこの世のすばらしい現実^にに属しているのだ)
9. In a month there will be purple stars on the clematis, and year after year the green night of its leaves will hold its purple stars. (p.30) (its=clematis)
(ひと月経てば、せんにんそうは紫色の星が実り、来る年ごとに緑の夜を思わせる葉は紫色の星を抱き続けるだろう)
10. It began to scramble all over the oval stellated globe of the tiny blossoms. (p.31)
(It=Bee)
(蜜蜂は細かい花が卵形に固まった球体の上を這いまわり始めた)
11. His eyes deepened into amethyst, and across them came a mist of tears. (p.33)
(眼は紫水晶を思わせる深い色を帯びて涙にかすんだ)
12. Grace was his , and the white purity of boyhood, and beauty such as old Greek marbles kept for us. (p.44)
(優美は彼のものであり、少年時代の白い純潔と我々のためにとどめている古いギリシャ時代の大理石と同様な美)

13. Was it not Buonarroti who had carved it in the coloured marbles of a sonnet-sequence? (p.45)
(十四行詩集の色彩大理石に形状や模様を表現したのはミケランジェロではなかったか)
14. 'They say that when good Americans die they go to Paris', chuckled Sir Thomas, who had a large wardrobe of Humour's cast-off clothes. (p.47)
(「善良なアメリカ人は死ぬとパリへ行くそうですな。」くすくす笑いながらサー・トーマスが言った。彼はユーモアが詰まった大きな化粧箱を抱えていた)
15. As the nineteenth century has gone bankrupt through an over-expenditure of sympathy,—— (p.49)
(十九世紀が心情の共感能力を乱費して破産したので)
16. The praise of folly, as he went on, soared into a philosophy, and Philosophy herself became young, and catching the mad music of Pleasure, wearing, one might fancy, her wine-stained robe and wreath of ivy, danced like a Bacchante over the hills of life, and mocked the slow Silenus for being sober. (p.50)
(彼の愚行礼讃はやがてひとつの哲学となって高揚し「哲学」それ自体は若くなり「快樂」の奏でる狂想曲に浮かれ酒に汚れた衣と蔦の冠をつけ人生の丘でバッカスのように踊り、サイリーナスがしらふでいるのをからかった。)
17. Looking like a bird of paradise that had been out all night in the rain, she flitted out of the room,…… (p.55)
(そそくさと部屋を出て行ったときの婦人は雨の中を一晩中飛び回っていた極楽鳥のようだった。)
18. This grey monstrous London of ours. (p.57)
(私たちのこの灰色のようなロンドン)
19. The black hands of jealousy. (p.60)
(嫉妬に狂う黒い手)
20. People like you – the willful sunbeams of life – don't commit crimes,…… (p.61)
(意のままに輝く人生の日光のような人間。そんな人間は罪など犯さない。)
21. Most people become bankrupt through having invested too heavily in the prose of life. (p.62)
(たいていの人間は生活の散文にあまりにも多く投資して破産してしまう。)
22. Every night of my life I go to see her act. (p.63)
(私は人生の夜ごと彼女の芝居を見に行く。)
23. I want a breath of our passion to stir their dust into consciousness, to wake their

- ashes into pain. (p.64)
(私は死体に意識を吹き込むためになきがらに苦痛を感じさせるために情熱の息吹を欲する。)
24. His nature had developed like a flower, had borne blossoms of scarlet flame. (p.64)
(彼の性質は花のように伸びて深紅の炎の花をつけた。)
25. It is what I call the depth of generosity. (p.65) (It=half past six)
(それは私が寛大の泥沼と呼んでいるものです。)
26. To note the curious hard logic of passion, and the emotional coloured life of the intellect... (p.66)
(情熱の奇妙な困難な論理や感情に彩られた知的生活を注意してみること)
27. Whose sorrows stir one's sense of beauty, and whose wounds are like red roses, (p.67)
(彼の悲しみは美の情景を揺り動かしその傷は赤いバラのようである。)
28. Was the soul a shadow seated in the house of sin? (p.67)
(魂は罪の家にすわる影だったのか。)
29. Quick breath parted the petals of her lips. (p.70)
(すばやい息が唇の花弁を引き裂いた。)
30. Some southern wind of passion swept over her, ... (p.70)
(情熱の南風が彼女の上をかすめていった。)
31. The joy of a caged bird was in her voice. (p.71)
(かごの鳥の喜びが彼女の声にもっていた。)
32. The mist of a dream had passed across them. (p.71) (them=her eyes)
(夢のもやは眼を横切ってきていた。)
33. That book of cowardice whose author apes the name of common-sense (p.71)
(常識の名をまねた臆病の本の著者)
34. She was free in her prison of passion. (p.71)
(彼女は情熱の牢獄で自由だった。)
35. Against the shell of her ear broke the waves of worldly cunning. (p.71)
(彼女の耳の貝に対して世間のずるさの波が碎けた。)
36. The arrows of craft shot by her. (p.71)
(悪知恵の矢が彼女をかすめて射られた。)
37. Spring-time for me, I think, a very dance of blossoms in blue skies. (p.78)
(私にとっては春、まさに青い空に咲く花のダンスを思わせる。)
38. A white dust, tremulous cloud of orris-root it seemed, hung in the panting air... (p.79) (it=dust)

(においしうぶの震える雲のような白いほこりが息切れする空気の中にかかっている。)

39. Women give to men the very gold of their lives. (p.91)

(女性たちは生涯のまさに最高の黄金を男たちに与える。)

40. A faint blush, like the shadow of a rose in a mirror of silver, came to her cheeks as she... (p.94)

(銀の鏡に映ったバラの影のようにかすかな赤みが彼女の頬にさした。)

41. The curves of her throat were the curves of a white lily. (p.95)

(のどの曲線は白ゆりの曲線だった。)

42. As though it were sweeter than honey to the red petals of her mouth, ...
'Dorian, You should have understood. But you understand now, don't you' ? (p.98)
(it=his name)

(あたかも彼の名が少女の口の赤い花卉の蜂蜜より甘いかのよう。)

43. I have grown sick of shadows. (p.99)

(私は影の病人になっていた。)

44. ..., because you realized the dreams of great poets and gave shape and substance to the shadows of art. (p.99)

(あなたが大詩人の夢を実現し芸術の影に形と実在を与えたからだ。)

45. Thin blue petals of flame they seemed, rimmed with white fire. (p.102) (they=lights)

(それらは白い火の縁どった青色の薄い花卉かと思えた。)

4) BA (Bを形容詞的) について

1. The gleam of the honey-sweet and honey-coloured blossoms of a laburnum. (p.7)

(蜂蜜の甘さと蜂蜜の彩りを持つきんぐさりの花のきらめき)

2. Pallid jade-faced painters of Tokio. (p.7)

(東京の画家たちの硬玉の青白い顔)

3. The duty gilt horns of the straggling woodbine. (p.7)

(埃にまみれたすいか1ずらの金箔の角)

4. With your rugged strong face and your coal-black hair, and this young Adonis, who looks as if he was made out of ivory and rose-leaves, ... (pp.8-9)

(ごつごつしたたくましい顔と石炭のように黒い髪、象牙とバラの葉でできているように思える若きアドニス)

5. Lord Henry smiled, and, leaning down, plucked a pink-petalled daisy from the grass, ... (p.12)

- (ヘンリー卿は微笑をもらし背をかがめてピンクの花弁をつけた雛菊を草の合間から摘み取った)
6. 'I am quite sure I shall understand it,' he replied, gazing intently at the little golden white-feathered disk,... (p.12)
 (「きっと私にはわかる」と彼は小さな金色の白い羽をつけた花盤をじっと見つめながら答えた)
7. Elderly ladies with gigantic tiaras and parrot noses. (p.13)
 (でっかい宝冠をかぶり鸚鵡の鼻を持った老婦人)
8. Your rose-red youth and your rose-white boyhood. (p.26)
 (赤バラの若さと白バラの少年時代)
9. His cool, white, flower-like hands. (p.28)
 (冷たく白い花のような手)
10. She laughed nervously as she spoke, and watched him with her vague forest-me-not eyes. (p.54)
 (彼は話しながら神経質に笑った。そして、忘れな草のような眼で彼を見た。)
11. The thought brought a gleam of pleasure into his brown agate eyes ... (p.67)
 (思考が茶色い瑪瑙の眼に喜びの光をもたらした。)
12. Dorian Gray's soul had turned to this white girl ... (p.67)
 (ドリアン・グレイの魂はこの白い少女に向けられた。)
13. He thought of his friend's young fiery-coloured life, ... (p.69)
 (彼は友人の若い炎に彩られた生命を思った。)
14. Mrs Vane winced, and put her thin bismuth-whitened hands on her daughter's head. (p.70)
 (ヴェイン夫人はたじろいだ。細い亜鉛の白い両手を娘の頭に置いた。)
15. Thin-lipped wisdom spoke at her from the worn chair, ... (p.71)
 (薄い唇をした「知恵」がすりへった椅子から彼女に話しかけた。)
16. Her flower-like lips touched the withered cheek, and warned its frost. (p.75)
 (its=cheek)
 (花のような唇がしおれた頬に触れその霜を暖めた。)
17. The tulip-beds across the road flamed like throbbing rings of fire. (p.79)
 (道路を横切ってチューリップの花壇が火の震える輪のように燃えていた。)
18. Lingering over his name with long-drawn music in her voice, ... (p.98)
 (彼の名前を長く引き伸ばした音楽的な声でだらだらよびながら)
19. ..., threading their way through the huge jade-green piles of vegetables. (p.102)

(うずたかく積み上げられた大きな硬玉の緑の野菜の中を縫うように歩きながら)

20. The nacre-coloured air. (p.102)

(真珠貝の色の空気)

21. cream-coloured silk blinds. (p.103)

(クリーム色の絹の日よけ)

5) like によるシミリ

1. The dim roar of London was like the bourdon note of a distant organ. (p.7)

(かすかなロンドンの騒音は遠くのオルガンの最低音のようだった)

2. A grasshopper began to chirrup by the wall, and like a blue thread a long thin dragon-fly floated past on its brown gauze wings. (p.12)

(キリギリスが塀のあたりで鳴き始め細長い蜻蛉が褐色の彩りの羽で青い糸のように浮遊していた)

3. '...', and looking up at the little clouds that, like ravelled skeins of glossy white silk, were drifting across the hollowed turquoise of the summer sky. (p.14)

(そんな勝手な言いぐさはない。ヘンリー卿は帽子を後ろにずらせながらつやつやした白い絹糸のもつれのような雲の小さい塊がトルコ色した夏空を横切るのを眺めながら叫んだ)

4. The mind of the thoroughly well-informed man is a dreadful thing. It is like a bric-à-brac shop. (p.18) (It=The mind)

(博識家の精神は話にならない代物でそれは古物屋の店先のようなものである)

5. His cool, white, flower-like hands. (p.28)

(冷たく白い花のような手)

6. It is of the great facts of the world, like sunlight, or spring-time, or the reflection in dark waters of that silver shell we call the moon. (p.29) (It=Beauty)

(美は陽光や春、あるいは人が月と呼ぶあの銀色に輝く貝が暗い水面に落とす影のごときこの世のすばらしい現実に属しているのだ)

7. That is the reason why, like Eve, they are so excessively anxious to get out of it. (p.43) (They=Eve)

(女性たちはイヴのようにアメリカから脱出したがっている)

8. Talking to him was like playing upon an exquisite violin. (p.44)

(ドリアンと話すことは精妙なヴァイオリンを弾くのに似ている)

9. No other activity was like it. (p.44) (it=experience)

(影響のような活動はほかはない)

10. The silent spirit that dwelt in dim woodland, and walked unseen in open field, suddenly showing herself, Dryad-like and not afraid, because in his soul who sought for her there had been awakened that wonderful vision to which alone are wonderful things revealed. (pp.44-45)
(薄暗い森林に棲み、姿なく野原を歩む無言の精霊が突如として森の精ドライヤッドのようになに恐れることなく姿を現したのだ。その精霊を求める人間の魂のなかにすばらしき事物をそれのみが透視できるすばらしき視力の目覚めが起こったからだ。)
11. When an old woman like myself blushes, it is a very bad sign. (p.49)
(私自身のようなおばあさんが顔を赤らめるとそれはたいへん良くない兆候です。)
12. The praise of folly, as he went on, soared into a philosophy, and Philosophy herself became young, and catching the mad music of Pleasure, wearing, one might fancy, her wine-stained robe and wreath of ivy, danced like a Bacchante over the hills of life, and mocked the slow Silenus for being sober. (p.50)
(彼の愚行礼讃はやがてひとつの哲学となって高揚し「哲学」それ自体は若くなり「快樂」の奏でる狂想曲に浮かれ酒に汚れた衣と蔦の冠をつけ人生の丘でバッカスのように踊り、サイリーナスがしらふでいるのをからかった。)
13. Facts fled before her like frightened forest things. (p.50) (things=animals)
(事実は森の動物たちのように彼女の前から逃げた。)
14. It was a tawdry affair, all Cupids and cornucopias, like a third-rate wedding cake. (p.58) (It=the house)
(小屋はけばけばしい作りで一面にキューピッドやコーヌコピアで飾られまさに三流のウェディングケーキのようだった。)
15. A figure like a beer-barrel. (p.59)
(姿はビール樽そっくり)
16. Eyes that were violet wells of passion, lips that were like the petals of a rose. (p.59)
(情熱の湧き出る泉のようなすみれ色の眼とバラの花びらのような唇)
17. People like you – the willful sunbeams of life – don't commit crimes, … (p.61)
(意のままに輝く人生の日光のような人間。そんな人間は罪など犯さない。)
18. We stood looking at each other like children. (p.62)
(子どものようにお互い顔を見合わせて立っていた。)
19. You look more like a prince. (p.63)
(あなたはさらにプリンスのようである。)
20. His nature had developed like a flower, had borne blossoms of scarlet flame. (p.64)

- (彼の性質は花のように伸びて深紅の炎の花をつけた。)
21. It will be like having a meat-tea, or reading an English novel. (p.65)
(It=half past six)
(それは肉料理つきの軽食を食べるか、英国小説を読むようなものだ。)
22. He was like one of those gracious figures in a pageant or a play. … (p.67)
(彼は野外劇や劇の優雅な姿の人に似ている。)
23. Whose sorrows stir one's sense of beauty, and whose wounds are like red roses, (p.67)
(彼の悲しみは劇の情景を揺り動かしその傷は赤いバラのようである。)
24. The panes glowed like plates of heated metal. (p.69)
(皿の形をした食器類が熱せられた金属の板金のように輝いている。)
25. The sky above was like a faded rose. (p.69)
(空は色あせたバラのようだ。)
26. He is like what Love himself should be … (p.71)
(彼は愛が彼自身であるかのようなようである。)
27. Her flower-like lips touched the withered cheek, and warmed its frost. (p.75)
(its=cheek)
(唇のような花がしおれた頬に触れその霜を暖めた。)
28. He was like a common gardener walking with a rose. (p.75)
(彼はバラを持って歩いている下品な庭師のようだった。)
29. His brows knit together into a wedge-like furrow. (p.77)
(彼はくさびのような深いしわの中に眉をしかめた。)
30. The tulip-beds across the road flamed like throbbing rings of fire. (p.79)
(道路を横切ってチューリップの花壇が火の震える輪のように燃えていた。)
31. The brightly-coloured parasols danced and dipped like monstrous butterflies. (p.79)
(明るい色彩の日傘が大きな蝶々のように踊り、下がったりしていた。)
32. They cut the air like a dagger. (p.79) (they=words)
(言葉は短剣のように空気を切り裂いた。)
33. You are like one of the heroes of those silly melodramas mother used to be so fond of acting in. (p.80)
(あなたはお母さんが得意になって演じていたばかげたメロドラマの主人公の一人のようだ。)
34. I will find out who he is, track him down, and kill him like a dog. (p.82)
(私は、奴の素性を暴いて追いつめて彼を犬のように殺すでしょう。)
35. Her hair clustered round her face like dark leaves round a pale rose. (p.87)
(彼女の髪の毛は青白いバラの周りの濃い葉のように彼女の顔の周りに鈴なりになった。)

36. She trembled all over, and shook like a white narcissus. (p.87)
(彼女は全身を震わせて白いナルシスのように震えた。)
37. He is not like other men. (p.88)
(彼は他の男たちとは違う。)
38. Beautiful sins, like beautiful things, are the privilege of the rich. (p.90)
(美しいもののような美しい罪は金持ちの特権である。)
39. The huge sunlight flamed like a monstrous dahlia with petals of yellow fire. (p.93)
(大きな太陽が黄色い炎の花弁をつけた巨大なダリアのように輝いた。)
40. A faint blush, like the shadow of a rose in a mirror of silver, came to her cheeks as she... (p.94)
(銀の鏡に映ったバラの影のようにかすかな赤みが彼女の頬にさした。)
41. Sibyl Vane moved like a creature from a fimer world. (p.95)
(シビル・ヴェインは優美な世界からやってきた生き物のように動いた。)
42. What does it matter if she plays Juliet like a wooden doll? (p.97)
(たとえ彼女がほんの人形のようなジュリエットを演じたとしても何が問題でしょうか。)
43. I cannot mimic one that burns me like fire. (p.99) (one=passion)
(私は火のように足しを燃やす情熱を真似ることができない。)
44. She flung herself at his feet, and lay there like a trampled flower. (p.100)
(彼女は彼の足元に崩れた。そして、踏みにじられた花のようにそこに横たえた。)
45. She crouched on the floor like a wounded thing. (p.101)
(彼女は傷つけられたもののように床にうずくまった。)
46. Drunkards had reeled by cursing, and chattering to themselves like monstrous apes. (p.101)
(飲んだくれは巨大なサルのようにのろいの言葉をはきながら独り言を言いながら千鳥足で歩いていた。)
47. The roofs of the houses glistened like silver against it. (p.102)
(家々の屋根は空に対して銀のように輝いていた。)
48. No line like that warped his red lips. (p.103) (that=lines of cruelty)
(彼の赤い唇をゆがめている残忍な線は一つもなかった。)
49. ... as he thought of her lying at his feet sobbing like a little child. (p.104)
(彼は小さな子どものように足元で泣き崩れている彼女を思うとき)

6) as によるシミリ

1. They seemed to be able to give a plastic form to formless things, and to have a music of their own as sweet as that of viola or of lute. (p.26)
(言葉は無形の事物に形態を付与しヴィオラやリュートの音同様の甘い調べを奏でることができる)
2. Grace was his , and the white purity of boyhood, and beauty such as old Greek marbles kept for us. (p.44)
(優美は彼のものであり、少年時代の白い純潔と我々のためにとどめている古いギリシャ時代の大理石と同様な美)
3. A lady of admirable good-nature and good temper, much liked by everyone who knew her, and of those ample architectural proportions that in women who are not Duchesses are described by contemporary historians as stoutness. (p.45)
(賞賛にも値する人のよさと善良な気質を持った淑女で、この女を知っているだけからも好感を持たれているが、その大柄な建築物的体格は、公爵夫人でない女の場合には現代の歴史家から肥満と呼ばれる類のものだった)
4. Fortunately for him she had on the other side Lord Faudel, a most intelligent middle-aged mediocrity, as bald as a Ministerial statement in the House of Commons,... (p.46)
(フォーデル卿は物分りのよい凡庸な中年男でその味気ないことは下院の大臣の声明そのものだ)
5. A novel that would be as lovely as a Persian carpet and as unreal. (p.51)
(ペルシャ絨毯のように美しく現実離れのした小説)
6. Women represent the triumph of matter over mind, just as men represent the triumph of mind over morals. (p.56)
(女性は精神に対して物質の勝利を象徴する。あたかも男性が道徳に対して精神の勝利を象徴するように。)
7. I have watched her wandering through the forest of Arden, disguised as a pretty boy in hose and doublet and dainty sap. (p.60)
(胴着を着、粋な帽子をかぶった美しい少年の姿でアーデンの森をさまようのを見た。)
8. She regarded me merely as a person in a play. (p.63)
(彼女は私をたんに劇中の人物としか見ていない。)
9. She will make the world as mad as she has made me. (p.64)
(彼女は私を熱狂させたように世界を熱狂させるでしょう。)
10. Certainly few people had ever interested him so much as Dorian Gray... (p.66)

- (確かにドリアン・グレイほど興味を持った人はいない。)
11. Moralists had, as a rule, regarded it as a mode of warning;… (p.68) (it=experience)
(モラリストたちは一般に経験を警告の様式とみなす。)
12. It was as little of an active cause as conscience itself. (p.68) (It=experience)
(経験は良心同様、活発な原因がない。)
13. All that it really demonstrated was that our future would be the same as our past,… (p.68) (it=experience)
(経験が本当に扇動するのは私たちの未来が過去と同じであるということだ。)
14. Did you love my father as I love Prince Charming? (p.71)
(プリンス・チャミングを愛しているようにあなたは私のお父さんを愛しましたか。)
15. I am as happy today as you were twenty years ago. (pp.71-72)
(私はあなたが20年前幸せであったように、今日、幸せです。)
16. He was not so finely bred as his sister. (p.72)
(彼は姉ほどの育ちの良さがなかった。)
17. Women defend themselves by attacking, just as they attack by sudden and strange surrenders. (p.74)
(女たちは攻撃によって自分たちを守る。ちょうど彼らが突然の奇妙な降伏によって攻撃するように。)
18. They passed words to each other as players at a game pass counters. (p.79)
(彼らはトランプゲームのパスの数を数える人のお互いにお互いに言葉を交わした。)
19. It should have been told to him before, if it was as he suspected. (p.81) (it=right)
(知ることが私の予期していたようであれば以前に私に言ってくれるべきだった。)
20. I didn't treat it as a business transaction. (p.88) (it=marriage)
(私は、結婚を商人の取引のように扱いたくない。)
21. Women treat us just as Humanity treats its gods. (p.90)
(女性は人間が神を扱うのと同じようにわれわれ男性を扱う。)
22. She makes them as responsive as a violin. (p.93)
(彼女はヴァイオリンのように彼らを反応させる。)
23. Her body swayed, while she danced, as a plant sways in the water. (p.95)
(彼女の体は水中の植物の振動のように踊った。)
24. If she knows as little about life as she does about acting,… (p.97)
(彼女が演技と同様、実生活についての知識ももっていなければ)
25. What could they know of love such as ours? (p.99)

(彼らは私たちの愛がどうしてわかるのか。)

26. The quivering, ardent sunlight showed him lines of cruelty round the mouth as clearly as if he had been looking into a mirror, ... (p.103)

(震えも燃えるような日光が、あたかも鏡を覗き込んだかのようにくつきりと口元の周りの残忍な線をかれに見せた。)

27. He had dreamed of her as a great artist. (p.104)

(彼は彼女を偉大な芸術家として夢見ていた。)

7) as if / as though によるシミリ

1. With your rugged strong face and your coal-black hair, and this young Adonis, who looks as if he was made out of ivory and rose-leaves, ... (pp.8-9)

(ごつごつしたたくましい顔と石炭のように黒い髪、象牙とバラの葉でできているように思える若きアドニス)

2. Then I feel, Harry, that I have given away my whole soul to someone who treats it as if it were a flower to put in his coat, a bit of decoration to charm his vanity, an ornament for a summer's day. (p.18)

(そんな時に、ハリー、私はまるで魂を上着に挿す花や虚栄を満足させる一片の装飾品、夏の日の装身具のように扱う人間に、私の魂を渡してしまったような気になる)

3. Lord Henry went out to the garden, and found Dorian Gray burying his face in the great cool lilac-blossoms, feverishly drinking in their perfume as if it had been wine. (p.28) (it=perfume)

(ヘンリー卿が庭に出てみるとドリアン・グレイは大きなひんやりとしたライラックの花に顔をうずめ、あたかもその香りを酒でも飲むように夢中に吸い込んでいた)

4. He felt as if a hand of ice had been laid upon his heart. (p.33)

(氷の手が心臓の上に置かれているような気持ちだった)

5. The fellow spitted his man as if he had been a pigeon. (p.41)

(奴は彼を鳩かなにかのように刺し殺した)

6. To convey one's temperament into another as though it were a subtle fluid or a strange perfume. (p.44)

(自分の気質を秘かな液体か不思議な香りのように他人に移し伝えること)

7. The mere shapes and patterns of things becoming, as it were, refined, and gaining a kind of symbolical value, as though they were themselves patterns of some other and more perfect form whose shadow they made real. (p.45)

(いわば単なる物の形や模様が洗練され一種の象徴的な価値を帯び、ついにはそれと

は別のあたかもより完璧な形式の模様でもあるかのようになる。具体的な形状や模様はその完璧な形式の影が現実化したものにすぎない)

8. She was a curious woman, whose dresses always looked as if they had been designed in a rage and put on in a tempest. (p.54)

(彼女は風変わりな女でそのドレスは怒りの中でデザインし嵐の中で着付けをしたという感じだった。)

9. They were both as grotesque as the scenery, and that looked as if it had come out of a country-booth. (p.59) (it=scenery)

(二人の役者は背景同様グロテスクでその背景は田舎の小屋から持ってきたようなものだった。)

10. He remembered it as if it had been the lash of a hunting-crop across his face. (p.77) (it=sneer)

(彼は冷笑があたかも狩猟用むちで彼の顔を鞭打つかのようにそれを覚えていた。)

11. You talk as if you were a hundred. (p.78)

(あなたはあたかも百歳のように話す)

3

このように文法的構造を考え分類していくとメタファの基本的形式としての「BofA」、シミリの基本的形式の「likeによるシミリ」がきわだっただけで多いことが理解できる。Bには「鮮明、含蓄、洞察その他の力を持つ凝縮されたイメヂとシンボルの語句であること」⁽⁶⁾が多いが、ワイルドのメタファ表現の特徴は知覚の面で鮮明な視覚をイメージさせるものや、その他、感覚器官に訴えるものが多いということが言える。

'horn of the straggling woodbine' 'roar of London' 'note of a distant organ' 'turquoise of the paradise' 'blossoms of scarlet flame' 'petals of her lips' 'dance of blossoms' 'cloud of orris-root' 'shadow of a rose' 'curves of a white lily' 'petals of flame'

などは、まさに読者を物語の絵画的世界に誘うのに大きな役割を果たしているものと想定できる。これこそ、感覚的メタファの効用に他ならない。また、

'the burden of a beauty' 'marbles of a sonnet-sequence' 'hands of jealousy' 'sunbeam of life' 'prose of life' 'night of my life' 'breath of our passion' 'wind of passion' 'mist of a dream' 'gold of lives'

などの ‘beauty’, ‘life’, に代表される抽象的な事象は、メタファによって、より具体的に断定され描写されることで、強調され誇張された表現になっている。ここでも、「大理石」、「日光」、「手」、「息吹」、「風」、「霞」、「金」など、対象とされるものは知覚的なものが多いことは注目に値する。

「likeによるシミリ」においてもおおむね同じことが考えられる。

- …and like a blue thread a long thin dragon-fly floated past on its brown gauze wings.
- …, and looking up at the little clouds that, like raveled skeins of glossy white silk,…
- …lips that were like the petals of a rose.
- His nature had developed like a flower,…
- and whose wounds are like red roses,
- The panes glowed like plates of heated metal.
- The sky above was like a faded rose.
- Her flower like lips…
- The tulip-beds across the road flamed like throbbing rings of fire.
- …her face like dark leaves round a pale rose.
- She trembled all over, and shook like a white narcissus.
- The huge sunlight flamed like a monstrous dahlia…
- The roofs of the houses glistened like silver against it.

「青い糸のような蜻蛉」、「白い絹糸をもつれさせた小さな雲」、「バラの花弁のような唇」、「花のような性格」、「赤いバラのような傷」、「金属皿のような食器」、「色あせたバラ」、「唇のような花」、「震える火の輪のようなチューリップの花壇」、「濃い葉のような顔」、「白いナルシスのような彼女」、「巨大なダリアのような日光」、「銀のような屋根」など多くの語句に知覚的な要素を感じざるを得ない。

これは、美しいものに出会うとき、ワイルドの修辞技法はその性質を表す比喻表現となって抽出されるものと考えられる。また、句や節だけではなく文そのものが広義の意味でメタファ表現と言えるものも存在する。それは、ヘンリー卿がドリアンと初めて遭遇する場面である。

“There was something in his low, languid voice that was absolutely fascinating. His cool, white, flower-like hands, even, had a curious charm. They moved, as he spoke, like

music, and seemed to have a language of their own.” (p.28)

(低い物憂げな声は人の心の調子を奪うものであり、冷たく白い花のような手にさえ不思議な魅力が感じられ、話すにつれて手も音楽のように流れ動きそれ自体が言葉を語っているようである。)

小説だけではなく、ワイルドは童話の中にも多くの『ドリアン・グレイの肖像』同様、同じ形式のメタファ、シミリ表現を多用している。その中でも特に彼が念入りに作り上げ精巧を凝らしたと言っている“Nightingale and the Rose”という作品を例にあげ引用を試みる。

1. His hair is dark as the hyacinth-blossom.⁽⁷⁾
2. His lips are red as the rose of his desire.⁽⁸⁾
3. Passion has made his face like pale ivory.⁽⁹⁾
4. Sorrow has set her seal upon his brow.⁽¹⁰⁾
5. As white as the form of the sea.⁽¹¹⁾
6. As yellow as the hair of the mermaid.⁽¹²⁾
7. As red as the feet of the dove.⁽¹³⁾
8. Flame-coloured are his wings, and coloured like flame is his body.⁽¹⁴⁾
9. His lips are sweet as honey, and his breath is like frankincense.⁽¹⁵⁾
10. Her voice was like water bubbling from a silver jar.⁽¹⁶⁾
11. Cold crystal Moon.⁽¹⁷⁾
12. Pale was it, at first, as the mist that hangs over the river – pale as the feet of the morning, and silver as the wings of the dawn.⁽¹⁸⁾
13. As the shadow of a rose in a mirror of silver, as the shadow of a rose in a water-pool, …⁽¹⁹⁾
14. Like the rose of the eastern sky.⁽²⁰⁾
15. Crimson as a ruby was the heart.⁽²¹⁾

このように、植物、身体、自然、動物、天候、天体などその語句の意味領域で捉えてワイルドの同じ観点を読み取ることができるのである。

ワイルドは、1888年7月13日にある校長先生にあてた手紙の中で次のように述べている。

“…I didn’t start with an idea and clothe it in form, but began with a form and I strove to make it beautiful enough to have many secrets, and many answers.”⁽²²⁾ (わたしはまずある

観念で持って始めてそれを形式の中に包むのではなく形式から始めてそれを多くの秘密と多くの答えを有するに足るのに十分美しくしようと努めた。）

つまり、小説同様、童話に表れる‘like’と‘as’の美しいシミリ表現が物語りの形を構築しているのである。前述してきたようにこの形式やこの語句の使い方は『ドリアン・グレイの肖像』でも多く見られた形式であり、特筆されたワイルドの修辞技法の一つであろう。さらにワイルドはその著『嘘の衰退』でヴィヴィアンの言葉をかりて次のように述べている。

“All that I desire to point out is the general principle that Life imitates Art far more than Art imitates Life.”⁽²³⁾

（私が指摘したいのはただ「芸術」が「人生」を模倣するよりはるかに「人生」が「芸術」を模倣すると言う一般的な原理なのだ。）

“Scientifically speaking, the basis of life — energy of life, as Aristotle would call it — is simply the desire for expression, and Art is always presenting various forms through which the expression can be attained.”⁽²⁴⁾

（科学的に言えば、人生の基盤は——人生のエネルギーはアリストテレスならそう呼ぶだろうが——表現欲に他ならない。そして「芸術」はこの表現の達成できる様々な形式をつねに揭示しつつあるのだ。）

このようにワイルドは小説家というよりはむしろ「人生」という「芸術」を創作する唯美主義者であるがゆえに、彼が『ドリアン・グレイの肖像』や『ナイチンゲールとバラ』などの多くの作品に、メタファとシミリに代表される修辞技法を多用し、その作品を彼の人生同様「美的な芸術作品」としたことも理解できるであろう。上述の手紙からも読み取れるように、観念は形式の中に包むのではなく、形式から始めて読者に考えさせるものであるという論理に基づくワイルドの意識的な比喩の使い方は、その作品の美的効果を高めるとともに、その表現の中に多くの彼の主題が内在されていると想定できる。

本稿のテーマとして考察してきた「メタファとシミリ」はワイルドの観念を強調的に浮かび上がらせるとともに、ひととき耽美的領域において大いなる美的相乗効果を高めたものと言えるのではないだろうか。

註

底本は、Wilde, Oscar, *The Picture of Dorian Gray*, Penguin Books, 1976のものを用いた。本文中にページ数を記す。

1. 山田 勝 「世紀末とダンディズム」 p.110.
2. Ibid., p.267.
3. Ibid., p.268.
4. 池田拓朗 「英語文体論」 p.150.
5. Ibid., p.165.
6. Ibid., p.150.
7. Holland, Vyvyan *Complete Works of Oscar Wilde* p.292.
8. Ibid., p.292.
9. Ibid., p.292.
10. Ibid., p.292.
11. Ibid., p.293.
12. Ibid., p.293.
13. Ibid., p.293.
14. Ibid., p.294.
15. Ibid., p.294.
16. Ibid., p.294.
17. Ibid., p.294.
18. Ibid., pp.,294.-295.
19. Ibid., p.295.
20. Ibid., p.295.
21. Ibid., p.295.
22. Hart-Davis, Rupert *Selected Letter of Oscar Wilde* p.73.
23. Holland, Vyvyan op. cit., p.985.
24. Ibid., p.985.

参考文献

- Chai, Leon *Aestheticism The Religion of Art in Post-Romantic Literature*, Columbia University Press, 1990
- Davis, Rovert Hart *Selected Letters of Oscar Wilde*, Low & Brydone Pritenters Limited, Thetford, Norfolk, 1979
- Ellman, Richard *The Artist as Critic; Critical Writings of Oscar Wilde*, The University of Chicago Press, 1969
- Donald H Ericksen *Oscar Wilde* G. k. Hall&Co., 1977
- Holland, Vyvyan *Complete Works of Oscar Wilde*, Collins Clear-Type Press, 1981
- Miller, Revert-Keith *Oscar Wilde*, Frederick Ungar Publishing Co., Inc, 1982
- Smith and Helfaud *Oscar Wilde's Oxford Notebooks*, Oxford University Press, 1989
- Trodd, Barlow, Amigoni *Victorian Culture and the Idea of the Grotesque*, Ashgate, 1999
- Wilde, Oscar *The Picture of Dorian Gray*, Penguin Books, 1976
- 荒木一雄・大沼雅彦・豊田昌倫編「英語表現辞典」(研究社、1985)
- 池田拓朗著「英語文体論」(研究社、1992)
- 海老池俊治著「ヴィクトリア時代の小説—社会史的背景を考慮して」(南雲堂、1981)

ワイルドの修辞表現（小説「ドリアン・グレイの肖像」に言及して）

平井博著「オスカーワイルドの生涯」（松柏社、1979）

平井博著「オスカーワイルド考」（松柏社、1980）

山田勝著「世紀末とダンディズム」（創元社、1981）

リチャード・D・オールティック著 要田圭治・大島浩・田中孝信訳「ヴィクトリア朝の人と思想」（音羽書房鶴見書店、1998）

キーワード：視覚，聴覚，触覚，味覚，嗅覚

Keywords：vision, sound, touch, taste, smell